端午の節供（たんごのせっく）

大和の端午の節供

ここで紹介するのは、昭和10年（1935）ごろまで市域で行われていた端午の節供の風習です。

5月5日の端午の節供には、外のぼりや鯉のぼり、五月人形などが飾られました。これらの節供飾りは、男の子の初節供のお祝いとして贈られたもので、母親の実家から外のぼりが、仲人や親戚、近所の人たちから鯉のぼりや五月人形などが贈られました。お祝いを贈ってくれた人たちには、お返しとして、赤飯や柏餅（かしわもち）にカサゴを添えて届けたり、家に招待してご馳走しました。

また、結婚後初めての端午の節供に、嫁の実家からショウブギ（菖蒲着）などといって、夏用の衣類や蚊帳（かや）を贈る風習もありました。このお返しにも赤飯や柏餅を届けたり、実家の両親を招いてご馳走しました。

この日は菖蒲（しょうぶ）の葉を屋根に挿（さ）したり、神棚や仏壇に供えたほか、菖蒲湯に入りました。屋根に菖蒲を挿すのはヘビ除けのためだといいました。また、大正時代ごろまでは、初節供のお祝いとして大きな凧（たこ）を作って揚（あ）げる風習が盛んでした。

鯉のぼり

五月人形

外のぼり

外のぼりは3本1組で、鍾馗(しょうき)や武者などの絵が描かれ、上に父方の家紋を、下に母方の家紋を入れました。鍾馗は中国の道教の神で、その図像には厄除けや疱瘡(ほうそう)（天然痘(てんねんとう)）除けの力があるとされました。

鯉のぼり

中国の登龍門の故事にちなみ、男の子の立身出世を願って飾られました。大正時代までは紙製の鯉のぼりが多く、破れやすかったといいます。

五月人形

鍾馗、武者、金太郎などの人形、かぶと飾りやよろい飾りなど、様々な種類があります。市域で贈られるようになったのは、昭和以降といわれています。

菖蒲(しょうぶ)

菖蒲湯などに用いられる菖蒲は、美しい花を咲かせるアヤメ科のハナショウブではなく、ショウブ科のショウブです（かつてはサトイモ科に分類されていました）。
葉が長い剣形であることと、芳香(ほうこう)があることから、魔除けになるとされてきました。

凧揚(たこあ)げ

大和を含む神奈川県内の広い地域で、初節供のお祝いとして凧揚げをしていました。竹の骨組みに紙を張り、表側に「寿(ことぶき)」、「勝」などの縁起の良い文字や武者絵を描き、裏側の上部に、トクサを裂いて撚(よ)った物や鯨(くじら)のひげを使って、ウナリ（唸り）の音を出す仕掛けを取りつけていました。